

## ミヤマラクサの2月どりにおける株養成法と加温方法

田口多喜子・檜森靖則

(秋田県農業試験場)

Method of root-stock propagation and heat in February forcing of *Laportea macrostachya*

Takiko TAGUCHI and Yasunori HIMORI

(Akita Agricultural Experiment Station)

### 1 はじめに

本県では中山間地域を中心に、冬期農業のひとつとして山菜の促成栽培が行われている。山菜の促成栽培は、夏期に養成した株を、晩秋に掘り取って伏せ込み、冬期に収穫することから、夏期の株養成には転換畑等を、冬期には遊休施設や余剰労力を活用できる利点がある。そこで、山菜のメニュー拡大をねらい、ミヤマラクサ(アイコ)の増殖法、播種養成根株を利用し安定して2月初旬収穫開始ができる低温処理及び加温方式などの促成栽培技術を検討する。

### 2 試験方法

(1) 試験年次：2000～2003年

(2) 実施場所：育苗及び本畑期；秋田農試露地圃場、促成栽培；硬質プラスチックハウス165平方メートル（普通非アロフェン質黒ボク土）

(3) 年次別試験内容：株増殖法（2000～2003年）；株分け及び種まきによる肥大状況の把握、養成方法別収量（2002年）；株分け養成2年株及び促成使用再養成株の収量、播種養成株の伏せ込み前低温処理と収穫期（2002年）、播種養成株の促成時の加温方法と収量（2003年）

(4) 耕種概要：株増殖法（2000～2003年）；播種日；1999年9月30日、株分け・定植日；2000年5月8日、鉢上げ日；2000年6月7日（25穴セルトレイ）、定植日；2000年6月28日、施肥（kg/a）；窒素：リン酸：カリ＝各0.6：0.3：0.3、栽植様式；床幅100cm、株間20cm、条間20cm、3条植え、遮光：70%（定植初年のみ）、養成方法別収量（2002年）；株分け養成株定植日；2001年6月15日、促成使用済み株定植日；2001年7月2日（農家より分譲）、播種養成株の伏せ込み前低温処理と収穫期（2002年）；株掘り取り；2002年11月20日、低温処理期間；11月28日～2003年1月9日、伏せ込み；1月10日（通電）、播種養

成株の促成時の加温方法と収量（2003年）；株掘り取り；12月4日、伏せ込み；12月22日、加温方式；地中加温は床土内配線・地温管理、空中加温は、トンネル内空中配線・気温管理、

(5) 伏せ込み年の管理方法

電熱量；250W/3.3平方メートル、トンネル内温度管理；伏せ込み開始後1週間は10℃、その後は20℃で管理、伏せ込み密度；30株（根株重100～299g）、25株（根株重300～499g）、25株（根株重500以上）/平方メートル、収穫目安；本葉4枚展開時

(4) 試験規模：試験規模：1区10株反復なし（2000・2001年）、1区50株反復なし（2002年）、1区20株反復なし（2003年）

### 3 試験結果及び考察

(1) 根株重50g以下で株分けし、2年間養成すると、伏せ込み時までの根株重が促成栽培で目標とする100g以上に肥大した。播種養成年数別の根株重は、植付時20g弱と小さいが、養成1年株で約100g、2年株で300g、3年株では350g以上となり、養成2年目までに根株の肥大が急速に進んだ（図1）。

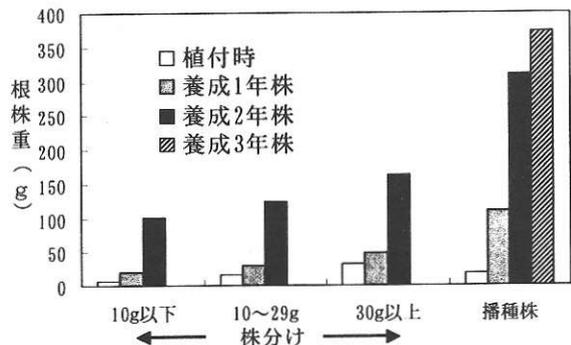


図1 養成年数と根株の肥大状況(繁殖方法別：2000～2003年)

(2) 株分け養成2年株を用いた促成時の10株当たり収穫本

数は、50本以上となり、平方メートル当たり30株伏せ込みができることから、収量は300g以上が得られる。また、促成栽培に用いた株を露地で11月初旬まで養成すると、株分け養成2年株と同等の収量が得られ、再利用ができる(図2)。促成栽培に用いる根株は、伏せ込み時の作業性や株揃いを考慮すると、播種養成株が適する。

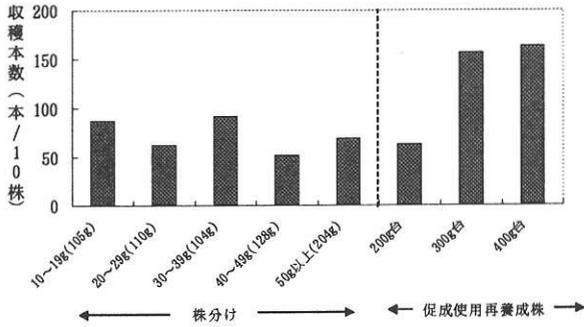


図2 養成方法別取穫本数(2002年)

注) 株分けの( )内数値は養成2年株の重さ

(3)播種養成根株を用い2月中の収量を高めるためには、根株重200~400g程度を用い、低温処理について検討したところ、0℃で11月下旬から1月上旬までの40日処理が、

有効である(図3)。

(4)空中加温は地中加温に比べ、2月内の収量及び全収量も勝る(図4)。萌芽を促進するためには、地温より気温の影響が大きい。この時根株重100g以上を用いると、平方メートル当たり500g以上の収量が確保できる(図4)。

4 まとめ

ミヤマイラクサ(アイコ)は、株分けや種まきによって増殖させるが、株分け養成2年株、播種養成2年株とも、促成栽培に供するための目標株重100g以上が得られる。促成使用済み株でも、秋まで養成すると再度利用が可能である。促成栽培には、株揃いの良い播種養成2年株が適する。この株を用い、11月下旬から0℃で40日間処理し、1月上旬伏せ込みすると、立春から収穫ができ、2月中の収量も高まる。空中加温方式とすると、地中加温に比べ収穫期が早まる。

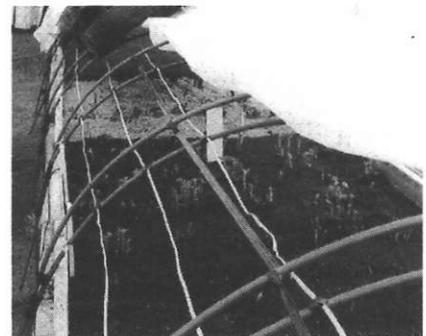
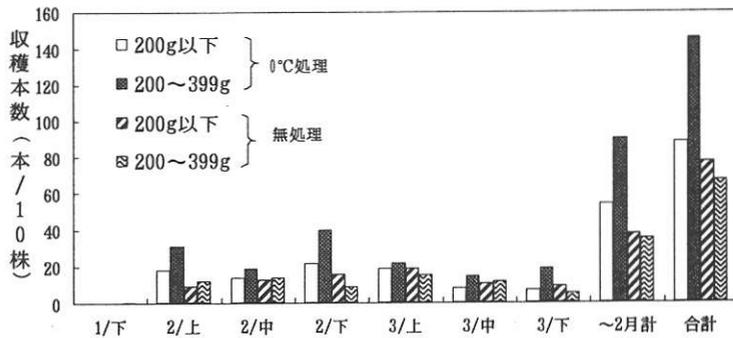


図3 播種養成株の伏せ込み前低温処理と取穫本数の推移(2002年;地中加温) 注) 播種養成2年株を使用

写真1 空中加温の方法

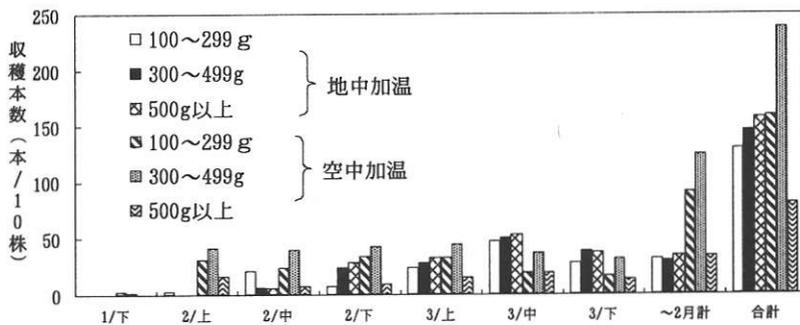


図4 播種養成株の促成時の加温方法と取穫本数の推移(2003年) 注) 播種養成3年株を使用

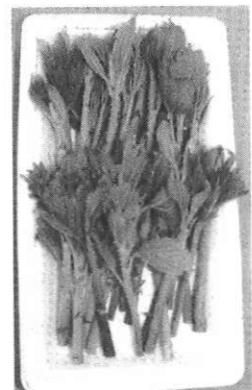


写真2 出荷時の姿